

**堀江市之側(いちのかわ)跡** 西区西区北堀江1 (宇和島橋南詰より南の筋)

宇和島橋南詰から南北に道があり、これを「堀江市之側(いちのかわ)」といいます。初めは「青物市場」で人が集まったのですが、その後、この筋の両脇に次々と興行されるようになった「芝居小屋」が人気を集めました。

江戸期に道頓堀などで人形浄瑠璃が興行され、ますます芝居人気が増しますが、幕末期には、天王寺から堀江に興行地を移すケースが多くなりました。

竹本義太夫、豊竹若太夫、植村文楽軒などの著名人が、「北堀江・市之側の筋」に移ってきています。

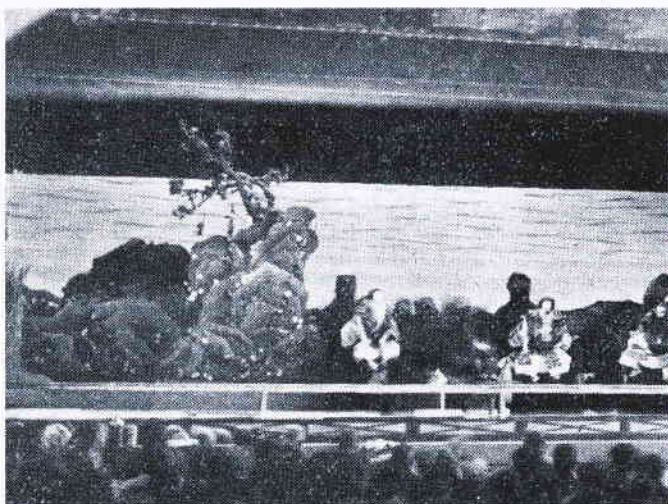
宇和島橋の南詰西の辻南にあった「明楽座」は特に人気があったようです。

文久元年(1861)イギリスの公使オールコックが来坂したとき、「堀江の芝居を見た」と記録に残しています。

明治後期から道頓堀の「弁天座」「朝日座」「中座」が挽回し、激しい競争の末、道頓堀に人気が出て、ついに大正期の半ば頃には廃れてしまいました。



現在の堀江市之側跡



明治期にあった明楽座跡

## 宇和島橋跡

西区新町2、北堀江1

「橋を渡れば、そこは市之側芝居小屋」

宇和島橋は、元和8年(1622)、長堀川の開削と同時に架けられた橋です。

当初は「遠江橋」という名称でしたが、明暦3年(1657)の古地図により「宇和島橋」と名称が変更になっています。

江戸期では、難波神社(中央区博労町)の夏祭りで、宇和島橋の上で太鼓を持って高く差し上げながら叩いたり、車輪のように廻しながら各人の腕前を競い合う行事が行われていました。

宇和島橋という名は、橋が架けられた際、橋の南詰(現在の北堀江1)に宇和島藩伊達遠江守の蔵屋敷があったことから「遠江橋」→「宇和島橋」と名づけられました。宇和島藩蔵屋敷は、享保9年(1724)、現在の朝日新聞大阪本社がある位置に移転しましたが、廃橋まで橋名は変更されませんでした。

宇和島橋の南にある道は、現在雑居ビルが建ち並び、大野記念病院まで通じる道で、かつてこの道は、「北堀江・市之側の筋」という名で有名でした。

最初は青物市場から始まり、その市の東西(左右)に興行された芝居小屋で一躍有名になりました。また、同橋の北詰にあった新町遊郭は、京都の島原・江戸の吉原とともに近世三大遊里の一つで、新町遊郭の南からの入口である「長堀口門」がありました。



宇和島橋南詰: 堀江市之側筋

## 新町遊郭「長堀口門」跡

西区新町2-28(三陽商会の東)

大坂の新町遊郭は京都の島原、江戸の吉原とともに、近世三大遊里の一つとして数えられましたが、そこには新町遊郭の南からの入口として「長堀口門」がありました。

現在はオフィス街で、北へ約300mのところ「新町北公園」(大阪厚生年金会館の前)がありますが、新町廊で最も有名な店である九軒町(くけんまち)にあった「吉田屋」は、店の前に提灯をつるし、堤を築き桜を植えていました。後に桜の名所となった「九軒桜堤跡」の石碑があります。

東からの入口は、新町橋跡にあり、現在石碑も残っています。



宇和島橋北詰 新町遊郭「長堀口門」跡周辺



# 新町遊郭跡

西区新町1、2

新町遊廓は江戸幕府によって公認された遊廓の一つです。  
 大坂新町(現在の大阪市西区新町)にありました。東を西横堀川、北を立売堀川、南を長堀川に画された地域で、新京橋町・新堀町・瓢箪町・佐渡島町・吉原町・九軒町・佐渡屋町が花街の中心でした。



「攝津名所図會大成其之二」に新町樓の図面

